

グローバリゼーション、国民国家、そして「ホーム」としての沖縄 ～「世界のウチナーンチュ」という物語の可能性～

新垣 誠

要 約

2016年10月末、第6回世界のウチナーンチュ大会が開催された。1990年の第1回大会以来、5年のインターバルで開催されるこの一大イベントは、沖縄にとって政権が交代しても継続される事業として位置付けられてきた。この事業が、政治の立場を超え、「ウチナーンチュ」というアイデンティティに深く根ざしてきたことが継続の要因ともいえる。グローバリゼーションが進む中で、国民国家はその流れを制御する力を失いつつある。一方で国家の矛盾は構造的暴力となり沖縄への差別と抑圧は終わることをしらない。「世界のウチナーンチュ」という言説は、グローバリゼーションと近代国家の狭間に帰属する「ホーム」として沖縄を浮かび上がらせている。本稿は、ハワイ沖縄移民社会における「ウチナーンチュ・アット・ハート」という言説や、沖縄の「万国津梁の民」という語りの中にある「ホーム沖縄」の物語の可能性を提示する。

旅や浜宿い草ぬ葉ぬ枕
寝ていん忘らん我親ぬ御側
(野宿の旅、草の葉の枕
寝ても忘れられない親の側)

旅宿ぬ目覚み枕側立ていてい
思出すさ昔 夜半ぬ辛さ
(旅中目覚めて、枕側を立てる
昔を思い出す あの夜半の辛さを)

渡海や隔みていん照月や一ち
あまん眺みゆら今日ぬ空や
(海を隔てても、照月は一つ
あなたも眺めているのだろうか、今日の空を)

柴木植いていかばしばしばと参り
真竹植いていかばまたん参り忍ば
(柴木を植えておきますので、しばしば通ってくださ
い真竹を植えておきますので、またいらしてください)

「浜千鳥節(チジュヤー)」より

はじめに

～北米沖縄県人会と浜千鳥節(チジュヤー)～

1980年代から90年代にかけて、北米沖縄県人会のメンバーシップは、会長を務めるジョージ・サンキ(山城)氏に代表される二世のグループと、「新一世」と呼ばれる戦後の移住者との間で、ある確執を抱えてい

た。アメリカに根ざした組織である以上、「オキナワ・クラブ(Okinawa Club)」という名称であるべきだ、と主張する二世派(二世はアメリカ生まれ)と、彼らの出身地でもある母県沖縄とのつながりを強調する新一世派との議論である。結局、この論争は当時大多数を占めつつあった新一世の意向が勝り、組織の名は「北米沖縄県人会」で落ち着いた。

日米戦争中の強制収容や日系人差別、二世部隊やアメリカへの忠誠登録を経験した二世達にとっては、アメリカ合衆国こそ祖国であり、同じ二世の集まった組織は国家の傘下に位置付けられることが自然であった。その一方、沖縄で生まれ育った新一世達にとって、沖縄こそが故郷であり、北米は「アメリカン・ドリーム」を叶えるための第二の故郷に過ぎなかった。また新一世は、「県人会」の名称にこだわることで沖縄県とのつながりを強調し、北米沖縄系コミュニティーの代表者として県とのパイプ役を果たそうとした。

沖縄県との関係も希薄で、アメリカ人としてのアイデンティティを強く打ち出す二世グループは、あくまでアメリカ社会の中で県人会組織を「ソーシャルクラブ」として捉えていた。その反面、新一世は沖縄県とのビジネスや交流を通して生計を立てている人も多かった。彼らにとって沖縄県との強いつながりは、名誉だけでなく生活の糧を得る上でもでも不可欠であったのだ。

沖縄県人会に集まるメンバーの多くは、そのホスト社会で比較的には成功者であり、社会的地位と経済的安定を確立したコミュニティーのリーダー格である、

と言っても過言ではないだろう。上記のような組織運営の議論を展開する役員に関しては、間違いなくリーダーとして名誉職が相応しい顔ぶれであった。

そのような県人会にも、気まぐれのように時折だけ顔を出す人がいた。三線の名手であった、その男性(90年代当時で60歳代中頃であろうか)も、滅多に県人会の集まりには参加しなかった。県人会主催のイベントで演奏を頼まれて県人会館へ打ち合わせに来たのだが、県人会のメンバーとして活動に参加していた私も、その時が初めての顔合わせであった。打ち合わせが終わり、皆が帰る準備をしていた時に彼は三線を取り出し、琉球民謡の「浜千鳥節(チジュヤー)」を弾き始めた。その哀愁漂う旋律と寂れた彼の声は、長年独身で苦勞を重ねてきた孤独と故郷沖縄への望郷の念が入り混じっているように聞こえた。

彼のような生活苦にもがきながら、独り身で人間関係も希薄で、県人会にも馴染めず、故郷に錦を飾れるわけでもない沖縄県出身者は少なくない。経済的成功と自由、第二の人生を夢見て渡ってきたアメリカの地で、故郷へも帰れずアメリカをホームとも思えない人々の影は、琉球新報や沖縄タイムスの記事にも反映されなければ、地元オリオンビールのテレビ広告に移ることもない。彼らは5年に一度の「世界のウチナーンチュ大会」に参加することもなければ、その名が出身地の郷土編纂資料に残ることもないだろう。

本論文では「チジュヤー」の旋律を基調低音に、そのような「成功者」とは呼べない人々の存在に思いを馳せながら、この先「世界のウチナーンチュ・ネットワーク」がどのように展開し発展を遂げていくのか、考察を試みてみたい。

I. ハワイにおけるウチナーンチュ・コミュニティの変遷

～被差別の歴史から「ウチナーンチュ・アット・ハート」まで～

2016年10月18日、沖縄で米軍北部訓練場ヘリパッド建設をめぐる、警備に当たる大阪府警の機動隊員が、抗議活動参加者に対し、「土人」や「シナ人」と差別的暴言を吐いたことが大きな社会問題となった。またその発言に対して鶴保庸介沖縄北方担当相は、「差別発言とは断定できない」との主張を続けた(沖縄タイムス、2016年11月11日)。このような発言や態度は、本

土出身の日本人の精神の深いところで脈々と生き続けている沖縄人差別を象徴していると言える。116年前、移民先ハワイでも沖縄人は日本人に同じ差別を受けていたからだ。

日本本土からの労働移民に遅れること10年、1900年にハワイに到着した沖縄県出身者を待ち構えていたものは、灼熱の太陽と身を切る労働だけではなかった。当時、広島や山口、熊本などから来ていた日本人労働者とは別に、沖縄県出身者の居住区(Okinawa Camp)は設置された。日本人より安い賃金で効率的に働いた沖縄県出身者を、日本人は脅威と捉えたとも考えられる。日本人は沖縄人を、「ジャパン・パケ(Japan Pake)」、「ジャパン・カナカ(Japan Kanaka)」と呼び、あからさまに差別した(Arakaki, 2002)。「パケ」とは「シナ人」と同じ差別的ニュアンスをもつ中国人への蔑称であり、「ウシンチー」と呼ばれる帯なしの着物スタイルや既婚女性の刺青、髪型や音楽、その発音などは、日本国領土から来ているものの、日本人には沖縄人が中国人のように見えたのだろう。当時、日本人は中国人へ対しても差別意識を持っていたので、その蔑称から沖縄人に対する意識もさほど変わらなかったと考えられる。また「カナカ」とは、先住民であるハワイ人に対する呼び名であるが、やはり「土人」と言った軽蔑の念を含む。ハワイのさとうきびプランテーションで、沖縄人に対して(中国人やハワイ人に対しても)使われていた差別用語が、116年経った今、沖縄で日本人の口から聞かれる事実は、その差別意識が生き続けていることを示しているのだろう。

1900年初頭の日本国内に、激しい沖縄人差別が存在したことは想像に難くない。その差別意識が移植される形で、ハワイ一世間の差別は存在したのだろう。しかし、この沖縄人差別は、二世の時代まで続いた。「オキナワ・ケン・ケン・ブタ・カウ・カウ(Okinawa ken ken, buta kau kau)」という侮蔑的なフレーズは、広く日系二世の間でイジメ・差別の手段として流通した。沖縄県人は豚の餌を食べる、という意味のこのフレーズは、沖縄出身者に養豚業を営む世帯が多いことに起因した。もちろん日系人社会全体を見ると、本土系の方が圧倒的に数では養豚業を営んでいたのだが、元々存在した沖縄人差別意識が、このような差別を生み出したのだろう。二世たちは親の一世の手伝いとして、一緒に近所へ豚の餌にする残飯を集めて回った。

その残飯を回収に来る沖縄系二世たちを見て、日系の二世たちは、そのような差別用語を浴びせた。沖縄系養豚業者が多く在住したカIMUMキ地区の高校は、「豚飼い高校」と呼ばれた。

二世の世代間では、沖縄系二世との結婚を反対する日系人親もいた(豊平、1980)。日系人コミュニティの祭りである「チェリーブロッサム・フェスティバル(桜祭り)」において、沖縄系女性がミス・チェリーブロッサムに選ばれることはなかったという。また日本語学校においても、沖縄人は適切な日本語が使えないとのことで、教師に採用されることもなかった。「ナイチ(内地つまり日本本土)」対「オキナワ」という差別構造は、多くの沖縄系二世の心に傷を残すことになる。

さとうきびプランテーションにおいては、「ハオレ(Haole)」と呼ばれる白人植民者をトップに、労働監督役のポルトガル系「ルナ(Luna)」、その他他民族労働者で構成されていた。中国系、日系、フィリピン系、韓国系、プエルトリコ系などの労働者を対象に、白人支配層は分割統治を行い、民族間の結束を挫こうとした。このプランテーションでの経験が、他民族社会ハワイの源泉であり、対立と共生の間で揺れる社会構造を作り出したといえる。二世の世代が経験した日米戦争は、ハワイにおいても反日感情を生み出した。一方で、キリスト教の隣人愛やアロハ・スピリットといった価値観は、反日運動を緩和する働きもした。日系人からの差別に反発を感じながらも、多くの沖縄系二世は、融和を大切にしたいといえるだろう。

三世の世代は沖縄系や日系、アメリカンよりも「ロコ(ハワイ生まれハワイ育ちのローカル)」である意識が最も強い。1960年代の黒人公民権運動、それから派生したマイノリティーの権利意識、そしてエスニック運動の中で育った世代だ。沖縄系三世の中には、親の二世が受けた差別に対して怒りの念を持つことから、日系人というアイデンティティよりも沖縄人を示す「オキナワン」を強調する者も少なくない。沖縄が1972年まで米軍の統治下にあったことをあげ、「沖縄は日本ではなく、アメリカの一部」、「あんなナイチの差別に晒されるくらいならアメリカの方がまし」などといった言説も生まれた。沖縄戦時中の集団死やスパイ容疑での日本兵による銃殺などは、ハワイ社会における日系人からの差別と共鳴し、オキナワンとしてのア

イデンティティを強化した。実際、米軍統治下で行われていた沖縄人への圧政については、沈黙されることが多い。あくまでアメリカ人の立場と目線で見ると沖縄と日本の関係なのだ。オキナワンとしての意識を反映するものとして国勢調査の結果が挙げられる。ハワイの二世・三世の間では、民族的バックグラウンドについての質問において、「日本人」を選択せず、「その他」をチェックして、かつこ内にあえて「オキナワン」と記述する人が毎回約2000人いるという(新垣、1998)。

ハワイ社会で混血が進むにつれて、「オキナワン」を名乗る人の顔も変化していった。1951年に発足した「ユナイテッド・オキナワン・アソシエーション・オブ・ハワイ(United Okinawan Association of Hawaii)」は、1995年には、「ハワイ・ユナイテッド・オキナワ・アソシエーション(Hawaii United Okinawa Association)」と改名された。最後にあった「ハワイ」の名称が先頭に来ることで、ハワイ社会に根ざした組織であることが確認できる。また「オキナワン」という沖縄人を指す言葉が、「オキナワ」という名称によって置き換えられた。これは、オキナワンつまり沖縄人のみならず、「オキナワ」というキーワードを元に集まる人を迎える身振りが見て取れる。混血が進み、血統でオキナワンを定義することが困難、もしくはさほど意味をなさなくなってきたと考えられる。中には明らかにオキナワンではなくても、例えばその配偶者や、琉球舞踊や音楽、空手など沖縄文化を通して、沖縄の心に触れ共感し、共に活動することを希望する者も増えていた。そんな人々が共に集い、組織の中心的役割をも担うように時代も変化してきた。「沖縄人の組織」ではなく「オキナワ」をキーワードに集う組織への変遷である。このような時代の変化に応じて沖縄人としての「血筋」よりも「心」や「スピリット」が、重要なメンバーシップの条件になってきたことも頷ける。「ウチナナンチュ・アット・ハート(Uchinanchu-at-heart)」という概念もそのような時代背景のなか生まれた。ハワイ沖縄連合会は、心がオキナワンであれば、メンバーシップを獲得し得る組織へと変遷を遂げていった。

混血社会・多文化共生社会のハワイにおいて、血筋からより包括的な精神的価値観にメンバーシップが移行したことは、ハワイ沖縄連合会にさらなる発展をもたらした。会員数は増え、家族会員としての登録を

することで、家族総出でイベントへ参加する世帯も増えた。毎年開催される「オキナワ・フェスティバル」は、日系全体の「チェリーブLOSSAM・フェスティバル」よりも規模の大きいイベントへと成長した。

それでは、「ハートがウチナンチュである」とい、のはどういうことであろうか。人々が口にするのは、移民一世の自己犠牲と相互扶助の精神である。ワイピオにあるハワイ沖縄センターの一世ガーデンの石碑にも、大きな自己犠牲を払い、その後の世代へ教育や豊かさを与えてくれた一世への感謝と敬意の言葉が記されている。一世達は、過酷な労働のみならず差別とも闘い、お互いが助け合うことで、多くの困難を乗り越えてきた、とその後世代はその精神的遺産を敬愛する。アロハ・スピリットやキリスト教的隣人愛といった他の価値観とも共鳴し、より人類にとって普遍的な色彩を帯びながらウチナンチュの心は、ハワイ社会一般の人々にも広く理解されることとなったのである。

II. 本土復帰後の沖縄と「世界のウチナンチュ」という物語の誕生

～肯定的なアイデンティティの回復へ向けて～

1982年、琉球新報社は新年号に「世界のウチナンチュ」特集を組んだ。これは沖縄県民の間で大きな反響を呼び、関連した本の出版やテレビ番組などの新たな企画も生まれた。なぜ沖縄県民は、労働移民という過去の物語を渴望したのだろうか。一大ブームとなった背景には、本土復帰後10年を迎えた沖縄の挫折があった。

復帰運動が盛り上がりを見せる中、県民の多くは平和憲法への帰属を願い、それによって米軍基地の全面返還も夢ではないと信じていた。戦後の米軍統治下で繰り返される抑圧や人権侵害から逃れられると一抹の希望を持っていた。日本本土の経済が急速に発展を遂げる中、沖縄の経済は低迷を続けていた。日本国の一部となることで、その恩恵を夢見た者も多かっただろう。しかし、この県民の期待は1972年の復帰で大きく裏切られることになる。それから10年経った1982年においても、経済状況の改善は見られず広大な米軍基地は残されたままであった。本土復帰を機に「本土並み」をスローガンのように掲げ、日本国の一県として邁進を試みた沖縄県民の間に、大きな挫折感が広がった。

時の県知事西銘順治は、沖縄の心を「日本人になりたくても、なれない心」と表現した。

1879年の沖縄県設置いわゆる「琉球処分」を経て、1982年に至るまで、沖縄の歴史は日本人への同化の歴史でもあった。アイヌ民族や他のアジア人と並んで文化的他者として扱われ、戦前戦中には琉球王国の歴史から天皇への忠誠心が足りない烙印を押された。御真影を抱きしめ軍民共生共死の思想の元、文字通り日本人として命を捧げても、スパイ容疑をかけられた拳銃の虐殺など、沖縄人が日本人として認められることはなかったと言える。

戦後27年に及ぶ米軍統治も、日本人への同化過程から引き離す一因となった。米軍が戦略的に使用した「沖縄」ではなく「琉球」という表現は、日本本土から沖縄をできるだけ切り離し、独自のアイデンティティを持たせることで、占領を円滑に行う意図があったとされている。戦後の焼け野原に沖縄の伝統文化を復興させるための支援を、米軍は積極的におこなった。しかしその後の米軍統治は、沖縄県民の心を平和憲法ナショナリズムへと駆り立てるには十分なほど、抑圧的なものだった。

「沖縄」対「日本」という二項対立の枠組みで、日本本土の背中を追いかけ、本土並みを目指す県民が息切れしてきた。沖縄を払拭し日本へ同化する試みは、復帰10年目にして大きな挫折を抱えたといえるだろう。その時に「世界のウチナンチュ」という琉球新報の言説は、二文法的思考から脱却するための第三の選択肢を与えた。つまり日本本土との比較で沖縄自らを定義し評価するのではなく、世界に広がるウチナンチュの中に、沖縄の自己像を再発見しようとする選択肢である。

実際にハワイやブラジルをはじめとする海外移民コミュニティにおいて、ウチナンチュそして沖縄系二世たちの多くは成功をおさめていた。スーパーマーケットやレストラン・チェーン店の経営者から政治・教育の場におけるリーダーにいたるまで、海外で活躍する「世界のウチナンチュ」の姿は、沖縄県民には輝いて見えた。琉球新報社が出版した「世界のウチナンチュ」を始め、沖縄テレビでは、1987年から2004年までの14年間にわたって世界30カ国で活躍するウチナンチュ取材し放映した。テレビ企画としては異例ともいえるロングランを記録した背景には、復

帰後急速に破壊されていく自然と失われていく「沖縄らしさ」に沖縄県民が戸惑いを感じながら、バイタリティーと忍耐力で逆境を乗り越えて成功した海外のウチナンチュの物語に感動と自らの誇りを覚えたからだろう。

前沖縄県知事の大田昌秀は、かつて「大和では刀を床の間に飾るが、沖縄では三線を飾る」と述べ、「大和を武士の文化」、「沖縄を平和の文化」と再定義し、肯定的な沖縄の文化的アイデンティティを打ち出したことがある。同じような言説が世界のウチナンチュを巡っても聞かれた。「大和は鎖国の文化」、「沖縄は海洋民族の文化」といった語りである。その歴史的信憑性はともかく、そのような言説が広く沖縄県民の心を掴んだ背景には、西銘前知事の発言に見られるような、沖縄が抱える低い自己肯定感があったのだと考えられる。

Ⅲ. 「世界のウチナンチュ大会」と「万国津梁の民」 ～歴史の再発見と新たな国際的自己像の創造

琉球新報の世界のウチナンチュ企画から8年後の1990年、沖縄県は第一回「世界のウチナンチュ大会」を開催する。8月23日から4日間に渡って沖縄コンベンションセンターにておこなわれた大会には、世界17国41地域から2,397人の海外ウチナンチュが参加した。その報告書(大会実行委員会、1990)には「涙の抱擁。再会を喜びあう固い握手。参加した四十七万人の一人ひとりに深い感銘を与え、数々のドラマが生まれていった」と記されている。この大会を通して、沖縄県民はメディアで目にした「世界のウチナンチュ」と出会い・再会を果たすこととなる。時の流れとともに忘れ去られるはずだった遠い親戚関係は再び繋がりを強め、多くの新しい出会いも生まれた。この再会の感動ドラマは、沖縄県民に大きな衝撃を与え、第2回大会へとつながるのである。

第1回大会では、「万国津梁の民宣言」が採択された。

私たちはふるさと沖縄に集い語り合いふれあいの中から沖縄の歴史と文化に誇りを持ち二十一世紀に向かって沖縄・人その広がり求めて常に進取の精神を発揮し万国津梁の民として世界の平和と強度の発展のために船出することをここに宣言します。

この宣言文の中に記されている「万国津梁」とは、1458年に尚泰久琉球王が鑄造させ、首里城正殿に掲げられていた「万国津梁の鐘銘文」に由来する。

琉球國者南海勝地而鍾三韓之秀以大明為
輔車以日域為唇齒在此二中間湧出之蓬萊
嶋也以舟楫為萬國之津梁異產至宝充滿十方利

(琉球国は南海の勝地にして三韓の秀を鍾め、
大明を以て輔車となし日域を以て唇齒となす
此の二者の中間に在りて湧出する所の蓬萊島なり
舟楫を以て万国の津梁となし異産至宝は十方利に充滿せり)

三韓の秀を集め、中国や日本とも親密な関係にある交易立国琉球国は、船を操って世界の架け橋となり栄える国である、と記されたこの銘文は知事公室の屏風にもなり、今や沖縄県の政治・外交の核をなす理念となっている。沖縄が、かつてアジアとの交易で栄え、活発な外交をおこなっていたという歴史的物語は、国際交流熱が高まる1980年代から90年代の日本においても、肯定的な意味を持った。国際社会における日本国の責任や役割が問われ始めた時代において、沖縄は歴史的にもその先駆者であった、という言説が成立したのだ。また海外へ雄飛を遂げた沖縄移民の活躍は、ウチナンチュが万国津梁の民であることを体現するものとされ、その存在は沖縄県民の自己承認と肯定的なアイデンティティーの一部をなしたといえるだろう。世界のウチナンチュ大会は、復帰後低迷を続ける沖縄社会が「沖縄人対大和人」という二項対立から、万国津梁の民という第三の選択肢を持つことで、沖縄社会の新たな方向性を見出す契機になったといえるだろう。

第2回大会は「さらなる国際交流ネットワークの構築を目指して」という目標が掲げられた。その大会目的は、こう記されている。

本県は、我が国有数の移民県である。戦前・戦後を通じて多くの県民が海外へ雄飛し、現在では海外に在住する県系人は北米・南米の国々をはじめ、東南アジア、ヨーロッパ、アフリカ等、世界の国々に約30万人と言われている。1世から4世までを含めたこれらの多くの県系人は、その移住先国にしっかりと定着し、政治、経済、文化、学術等の各方面

で活躍、その国の開発、発展に寄与すると共に、本県と在住国との交流の架け橋として大きな役割を果たしている。

この世界のウチナーンチュのネットワークを我が県の貴重な人的資産として再確認に、沖縄県が国際交流に果たす多大な役割をアピールする事業として、1990年（平成2年）8月に「世界のウチナーンチュ大会」が開催された。沖縄県の祖国復帰20周年の記念事業として行われたこのイベントは、世界各国のウチナーンチュやその関係者等、全世界的なネットワークの人的な核として「ウチナーンチュ民間大使制度」を発足させ、その活動を通じて、より強力な国際交流事業として、具体的な展開をスタートさせ、今日に至っている。

沖縄県の発展のためには世界のウチナーンチュを「人的資源」として捉え、国際交流事業を展開する上でのネットワークとして活用する「世界のウチナーンチュ・ネットワーク」の基本構想が伺える。沖縄が移民県であることの利点を生かし、これからの国際化に向けて海外移民コミュニティとのネットワークを活用すべきとの見解だ。そして目的文はこう続く。

また、第3次沖縄振興開発計画において、本件の国際交流の基本方向及び推進方針として「南における国際交流拠点の形成」を図ると位置づけており、国際交流の架け橋としての本県の役割は一層重要になっている。（省略）国際交流を重要な施策とする沖縄県が、地方レベルから国際交流事業を展開、アピールする意義は、我が国にとっても大きいものである。（省略）第2回世界のウチナーンチュ大会の行われる1995年（平成7年）は、太平洋戦争・沖縄戦終結50周年の節目に当たる。国際交流が平和を前提とし、平和を創出する要件であることを考えた時、県民一人ひとりが、今後21世紀に向けて本県の国際交流・協力事業を強力かつ発展的に推進していくことは、沖縄はもちろん日本および世界各国にとっても重要な意義を有するものである。

日本国の一部として沖縄県が示さなければならないのは、約3億という予算を投入して開催されるこの世界のウチナーンチュ大会が、どう国益にかなうかという説明である。目的文の後半は、この事業が日本国の「南における国際交流拠点の形成」に役立つ、という沖縄振興開発計画に沿った正当性が述べられている。当時、急速な発展を遂げる東南アジアの新興工業国への

経済進出を狙う日本経済の足がけが沖縄であった。

沖縄県民の意識が、「本土並み」から目をそらし「万国津梁の民」という自意識へ向かう中、その重要なイベントとしてのウチナーンチュ大会を、あくまで国家の枠組みと国益という視点から正当化せざるを得ない葛藤が、沖縄県行政側にはある。「世界のウチナーンチュ」という言説もまた、労働移民や沖縄戦、米軍統治や本土復帰といった近代国家の矛盾と暴力から生まれたにも関わらず、国家の策略に絡み取られるかもしれない危険と隣り合わせの綱渡りなのだ。

富山一郎（2002）は、戦時中沖縄県師範学校教諭であった安里延の語りを引き、沖縄の海洋民族という歴史的故事が「南洋発展」という新たな文脈の中で、日本の南進思想に絡み取られながら帝国主義の一旦を担う語りへとなっていった過程を明らかにした。国からの補助金や沖縄振興特別推進交付金を頼りに、国家の意向を汲み取りながら開催される世界のウチナーンチュ大会にも、国家の論理は常に影のようにつきまとう。

2016年10月に開催された第6回大会の開会式で、翁長雄志県知事は下記のように挨拶した。

はいさい。世界ぬウチナーンチュぬ御方々、祖先ぬ生まれ島、うちなーんかいめんそーちくみそーち、いっぺーにふえーでーびる。わったーや待ちかんでいそーいびたん。（省略）住む国こそ異なれど、ここに集まる私たちは皆、アジアの海で縦横に船を走らせた琉球の民の末裔であり、その万国津梁の精神は、ウチナーネットワークという形をとり、時空を超えて受け継がれてきました。本県にとって最も貴重な財産ともいえるこのネットワークを発展させ、次世代に継承するためには、さまざまな国と地域のウチナーンチュが世代と立場を超えてお互いを知り、絆を深め、自らのアイデンティティを確認し、沖縄の未来に目を向けて心一つにすることが重要だと考えます。本大会は、その思いを再確認し、決意を共有する機会です。（省略）本大会では、世界に誇る沖縄独自のソフトパワーの魅力や、イベントを通して皆さまにお届けし、世界中に発信していきます。（省略）

前段においては、ウチナーグチ（琉球語）での挨拶をするというパフォーマンスで会場を大いに盛り上げた。海外特に南米からの参加者は、日本語は分からなくてもウチナーグチを理解する者も多い。「海洋民族

としての歴史」や「万国津梁の精神」、「ウチナーネットワーク」といった概念は、もちろん肯定的な沖縄のアイデンティティを承認する「内輪」へのメッセージだといえる。しかし、これらの概念はまた、第三次沖縄振興開発計画に盛り込まれた文言であり、これらの歴史的遺産が、日本の東南アジアへの政治的・経済的進出の玄関口としての「南の国際交流の拠点」として位置付けられてもいる。また、後半の「沖縄独自のソフトパワーの発信」とは、沖縄県の取り組む事業であり、県政運営の基本的指針としての「21世紀ビジョン」などの方針を取り込んだ上での発言である。これらの概念は、一般の海外参加者にとっては、おそらく共有しづらいものだろう。しかし第6回大会の現在まで、世界のウチナーンチュ大会が行政主導である所以だともいえる。

ここでの指摘は、沖縄県政が日本国家の回し者か、それともウチナーンチュの味方かなどといった紋切り型の不毛な議論をするためではない。このような綱渡りはむしろ沖縄が琉球の時代から政治戦略としておこなってきたインテリジェンスであり交渉術なのだ。

IV. 「世界のウチナーンチュ」言説の二つのベクトル ～生まれ島と世界のはざままで～

「世界のウチナーンチュ」という言葉は、二つのベクトルを含んでいる。一つは「ウチナーンチュ」という極めて小さな島の狭い社会での親密性を表現するベクトルであり、もう一つは「世界」という外の世界へと開かれたベクトルだ。「海洋民族」や「万国津梁の民」といったアイデンティティも、その両方のベクトルを含んでいるといえる。

アイデンティティは政治や経済、文化や教育など様々な社会的領域において利用され、政治的革命や国家の独立など時として大きな社会変革の道具となる。しかし、同時に極めて個人的であり、感情的な側面を持つ。親密性や愛着の問題でもある。ヴァナキュラーなウチナーグチ(琉球語)に懐かしさを感じ、お互いがウチナーンチュであることに強い仲間意識を感じる感覚は、極めて固有の体験や文化的価値観、日常生活の感覚に由来する。

第6回世界のウチナーンチュ大会で開催された「かたやびらしまくとぅば」大会では、歓喜と涙で会場が湧いた。それはかつてのニューヨーク・アポロシアター

で、アフリカ系アメリカ人達が黒人文化を通して自らの存在価値を承認し合う過程を彷彿とさせるものであった。まさしく「母語」や「マザータング(母の舌)」という言葉で表現されるように、固有の言語は親密性や愛着と編み込まれて人々の心情や価値観、世界観や文化を作り上げる。ジェンダー的視点から「母」を「親」と置き換えても良いだろう。同じウチナーンチュである、ウチナーグチで気持ちが通い合うとは、まるで親や家族との関係のような極めて親密性や愛着に基づいた肌感覚なのだ。

同じウチナーンチュ同士が出会うと、お互いに接点を探ることがよくある。狭い島であることから、出身地や出身校が同じであったり、共通の友人がいたり、遠い親戚である可能性も低くないのだ。沖縄という狭い島社会が作り出すこの近い距離感こそが、親密性や愛着の土台ともなる。そうすると、ウチナーンチュというアイデンティティは、その限りにおいて極めて個人的領域の問題であり、ウチナーンチュ以外の他人にとやかく言われるものではなくなる。そんなアイデンティティに向けられた外部からの眼差しや物言いは、プライベートな心理空間を侵犯する行為としてしばしば捉えられる。アメリカ国内において、主流白人による民族的マイノリティーのアイデンティティ研究が当事者たちに嫌悪感を持って捉えられることがある。政治的支配や植民地主義との共犯関係にある学問的研究が、自己のポジションへの批判的態度を欠いたまま、他者へ不躰な眼差しを向け、抑圧へ加担する結果を招くことも一つの理由だろう。

強い郷土愛ともいえる沖縄への愛着と同時に、「世界」というベクトルは、狭い島から広い海へと向かう。沖縄が物理的に小さな島であるがゆえんかもしれない。「ニライカナイ」という沖縄固有の世界観は、神々の住む理想郷を海の向こうへ設定した。琉球王国時代においても、「海邦養秀」という言葉を通して、小さな島国であるがゆえに大陸へと渡り、知識を持ち帰って王国のために生かすことが謳われた。このような外へと開かれた思想は、「沖縄移民の父」として知られる当山久三の「いざゆかん、吾等が家は五大州」というスローガンにつながったとも考えられる。

「世界のウチナーンチュ」という概念のもう一つのベクトルである「世界」は、沖縄の社会を考える要因ともなっている。「チャンプルー文化」という言葉が示

す通り、沖縄は多文化社会であるという認識がある。琉球王国時代の中国、日本、東南アジアからの文化的影響、そして戦後アメリカ軍占領によってもたらされたアメリカ文化、米軍基地経済に付随してきたフィリピンやインドの文化などの融合などである。その一方で、米兵と沖縄女性との間の混血児やフィリピン人、奄美や宮古出身者への差別も存在してきた。

「世界のウチナーンチュ」や「万国津梁の民」が示唆するものは、まさしく現在沖縄が抱えている極めて排他的で差別的な負の側面を乗り越え、真の多文化共生社会が築けるかという挑戦でもある。5年に一度の大会では、大手を振って歓迎した南米からの帰国県系人も、一旦沖縄へ引き上げてきて一緒に住むとなると、差別の目を向けることがある。第6回大会の関連イベントとして開催された「ワールド・ウチナー・シンポジウム」において、沖縄系ペルー三世で15歳の時に家族で沖縄に移住してきた普久原さおりさんは、沖縄社会の抱える無関心さと閉鎖性について言及した。沖縄系三世でハワイ沖縄連合会会長のトム・ヤマモトさんは、一世の遺産である「ユイマール（相互扶助）の精神」やアロハ・スピリットを基盤に共生を志す多文化社会ハワイの現状、「ウチナーンチュ・アット・ハート」の例を挙げ、改めて万国津梁の精神とは、多文化共生の精神であることを指摘した。

またその反面、「万国津梁の精神」を基礎にした沖縄のアイデンティティが、単純に非歴史化されたコスモポリタニズム型多文化共生へと向かうこともないだろう。それはウチナーンチュの否定的アイデンティティが、ハワイにおいても沖縄においても（そしておそらく多くの移民先コミュニティにおいても）、日本人からの差別によって形成されてきた側面を含む、という所以である。日本人の文化的他者として、日本人に劣る民族として定義されたことから現在の沖縄のアイデンティティが生まれたともいえる（富山、1991）。かつてサミュエル・ハンチントンは「文明の衝突」（1998）で、冷戦後のアイデンティティを次のように述べた。

人びとは祖先や宗教、言語、歴史、価値観、習慣、制度などに関連して自分たちを定義づける。たとえば、部族や人種グループ、宗教的な共同体、国家、そして最も広いレベルでは文明というように、文化的なグループと一体化するのだ。人々は、自分の利益を増すためだけでなく、みずからのアイ

デンティティを決定するために政治を利用する。人びとは自分が誰と異なっているかを知ってはじめて、またしばしば自分が誰と敵対しているかを知ってはじめて、自分が何者であるかを知るのである。

ハンチントンの議論が、対立ばかりを強調した本質主義であるという批判は、「文明の衝突」後多く聞かれた。しかしこの「本質主義」という合理的かつ理論的主張は、アイデンティティの不合理かつ感情的部分を無効とする暴力的な主張でもある。それは政治的二ヒリズムへと社会運動を追いやり、米軍基地の押し付けなど沖縄に対する構造的暴力と共犯関係にある。また沖縄の人権的抑圧や人間の最も基本的な欲求である自己肯定さえも否定する暴力的な言説として作用する。前述の通り、アイデンティティはポリティカル・コレクトネスや理論的正義のみで一刀両断不可能な、極めて個人的領域に息づく物語でもあるのだ。

権力的優位性から差別と「敵対」関係を初めに構築したのは日本人側であるが、政治や学問的言説を通して位置づけられた文化的他者そして劣性としての沖縄人アイデンティティは、克服されるべき受難の歴史の物語となって、次世代へと伝承されていくのである。そして「世界のウチナーンチュ」という語りにも、一つの共有された物語がある。それは、かつて万国津梁の民として栄えていたウチナーンチュが、薩摩藩の侵略、琉球処分を経て日本に隷属化し、差別されながら苦渋をなめていた闇の時代に始まり、世界へと雄飛した移民が差別や厳しい労働に耐えながらそれを克服し、最終的には栄え幸せを手にする、という物語である。また沖縄では悲惨な沖縄戦を経験し、戦火の中から再び立ち上がって、戦後の沖縄を築いていったという物語だ。どちらも苦境を乗り越え、自らの力で幸せを掴もうとする人類普遍の感動物語である。この物語は、各移民コミュニティにおいて現実であるだけでなく、それを体験していない次世代へも感動を持って受け継がれるほど魅力的である。

第6回大会へ参加するために沖縄へきた若い世代のウチナーンチュが、軍事基地移設問題で揺れる辺野古や高江へと足を運び、地域住民の社会運動へ共感を示したのも、彼らがこの大きな沖縄の物語の一登場人物として自らを捉えているからではなかろうか（親川、2016；琉球新報、2016年10月25日）。彼らは、それぞれ

の国や地域での人権抑圧やそれに対する抵抗運動と沖縄の運動を重ね合わせる。カナダの先住民イヌイットやハワイのネイティブ・ハワイアンに対する抑圧、ブラジルでの武力的な市民デモ制圧などと沖縄をつなぎ合わせ、グローバルな視点から沖縄の抵抗を人類普遍の闘いとして、同時に自分自身に関わる個人的な物語として紡ぎ出していく。現在も続く日本政府による沖縄への構造的暴力、そして日本人の沖縄人に対する差別意識は、「対大和」という「敵対」せざるを得ない沖縄アイデンティティを沖縄の内部においても、世界のウチナンチュの間においても、再生成し続けているのだ。沖縄人への「土人」差別発言や、沖縄戦中、日本兵が行なったスパイ嫌疑による住民虐殺の新たな証言（琉球新報、2016年11月15日）などは、多言語化され瞬時にSNSを通して世界のウチナンチュの間でも共有される。グローバリゼーションは、情報の流れと共有を加速化させ、「抵抗としての沖縄人アイデンティティ」を強化しているのだ。

V. グローバリゼーションと「ホーム」

～グローバル資本主義の暴力、近代国家の矛盾、人間性の喪失～

果たしてグローバル化の流れは、ディアスポラ（離散共同体）としての沖縄人アイデンティティを強化し、日本国やその他の近代国民国家の暴力からウチナンチュを解放するのだろうか。ヨーロッパにおける英国のEU離脱や移民排斥を掲げる極右政党の台頭、米国の保護主義的政策転換などは、ハイパーグローバリゼーションへ逆行する動きを示している。同時に近代国民国家が約束したはずの民主主義は薄れ、国内においても経済格差は拡大するばかりである。新自由主義が蔓延する現在の世界においては、国民国家もグローバリゼーションも民主主義どころか基本的人権さえも保障しない。ダニ・ロドリック (2013) が指摘するように、世界はまさしく「グローバリゼーション・パラドクス」に直面しているのだろう。

沖縄の受難の歴史は近代日本国民国家の歴史と共にある。「世界のウチナンチュ」という言説や「世界のウチナンチュ大会」の誕生は、「日本人」という均一性への暴力的な同化の圧力を持って、沖縄の個性を否定し差別し、排除してきた日本国への抵抗でもある。通信技術や移動手段の発達というグローバリゼーシ

ョンの側面が、世界のウチナンチュをつなげてきたのだが、そもそも沖縄の労働移民を生んだのもグローバル資本主義経済だった。その二面性の狭間に世界のウチナンチュ・ネットワークも位置する。アントニオ・ネグリとマイケル・ハート (2003) が「帝国」と表現したグローバリゼーションの新たな政治的主体は、国民国家よりもはるかに巨大で強力なものだった。

生産と交換の基本的要素——マネー、テクノロジー、ヒト、モノ——は、国境を越えてますます容易に移動するようになっており、またそのため国民国家は、それらの流れを規制したり、経済にその権威を押しつけたりする力を徐々に失ってきているのだ。

しかしグローバル資本主義に対して国民国家の権力が弱体化しているからといって、民主主義や多様性に基づく人権が保障される訳ではない。かつての帝国主義にはない、新たな管理のシステムが「帝国」内では機能すると、ネグリとハートは述べる。

帝国主義とは対照的に、〈帝国〉は権力の領土上の中心を打ち立てることもなければ、固定した境界や障壁にも依拠しない。〈帝国〉とは、脱中心的で脱領土的な支配装置なのであり、これは、そのたえず拡大し続ける開かれた境界の内部に、グローバルな領域全体を斬新的に組み込んでいくのである。〈帝国〉は、その指令のネットワークを調整しながら、異種混交的なアイデンティティと柔軟な階層秩序、そしてまた複数の交換を管理運営する。

そのような「帝国」の主権的権力に抵抗する主体として、ネグリとハートは「マルチチュード（多様な人々）」を想定している。果たしてグローバリゼーションに身を委ねることもなく、しかし近代国民国家に希望を見出して回帰することもない人々は、今の地球社会で実在できるのか。「万国津梁の民」というアイデンティティが、ディアスポラ的多文化共生の中にありながら、多様性を尊重すると同時にそれを越えて統合的な力を持った言説となってネットワークを生成できるか。ますます加速化するグローバル化の中で、世界のウチナンチュという言葉も、その可能性が問われている。

かつてグローバル資本主義は、ウチナンチュを移

民船に乗せ、故郷から遠く離れた未知の地へと誘った。それは安価な労働力という生産性の一部を担った旅立ちであった。現地における重労働も、効率性と生産性の原理に支配された非人間的な手段によってもたらされた。グローバル化が急速に進む今日、効率性や生産性を追求する管理システムの力は、一層強大なものとなっている。さらにアメリカナイゼーションという均一性への圧力も加わり、私たちは多様性や人間性までも失いつつある。沖縄でも固有の言語や文化は失われ、人間関係は稀薄になりつつある。多くの海外移民社会においても、文化的ルーツからの距離は広がり、世代間の文化的格差から精神的距離を感じる若者たちも多い。グローバリゼーションの波は沖縄のみならず世界を包み込みながら人間性を剥ぎ取り、近代国家の矛盾は沖縄でも移民先の国においても暴力としてのしかかる。私たちはまるで自分の帰れる「ホーム」を失ったようだ。ホームとは私たちが、親密性と愛着を育む場所に他ならない。それは、自らを無条件で承認してくれる空間であり、人と人との繋がりが安心を生む場所だ。グローバリゼーションと国民国家の狭間に、沖縄というホームは存在するのかもしれない。多様な人々が多様性を失うことなく、精神的つながりを感じ、まるで家族のような感覚で集える空間だ。

文明や近代科学の発展とともに世俗化が進み、ヨーロッパにおいてはキリスト教の力も弱まってきた。しかし21世紀になって私達が目撃したものは、宗教の名の下に命をも捨てる人々の姿である。近代化やグローバリゼーションは、一方で物質的欲求を満たしながら、精神的不満を人々の中に生んできた。「ウチナンチュ・アット・ハート」や「アロハ・スピリット」、「万国津梁の精神」やビギンの「島人の宝」などは、ホームという聖地における人間性回復のためにあるのかもしれない。

印刷による情報技術の発展と資本主義経済を基礎に成立した近代国民国家を、ベネディクト・アンダーソンは「想像の共同体」と呼んだ(1983)。例えその共同体が人工的に鑄造されたものだとしても、その構成員である国民は愛着を抱くとアンダーソンは説く。「戦争の世紀」と呼ばれた20世紀においては、「自己犠牲」がその愛着の基盤となった。かたや「世界のウチナンチュ」というディアスポラの共同体は、貧困、戦争、日本人からの差別という受難の歴史の共有、そしてそ

れを乗り越える相互扶助や寛容の精神が愛着の基盤といえるだろう。親族または移民先での疑似親族的紐帯というマイクロな人間関係がその単位でありながら、その愛着のベースとなる「ホーム」の物語は国境や文化の違いを超えて、マクロな広がりを見せている。

「ホーム」という物語の最大の特徴は、近代国家に不可欠な軍事や政治という語りが不在な点だ。極めて人間的な愛着を基礎としたこの物語は、グローバル資本主義経済のアジェンダへの対抗言説とも考えられる。ユヴァル・ノア・ハラリは(2016) 想像の共同体としての近代国民国家、資本主義の基礎となる貨幣経済など、近代人間社会の歴史を作り上げてきた価値観を虚構(「フィクション」)と呼び、人間の幸せには繋がらないとした。「世界のウチナンチュ」や「ホーム」というこの新たなフィクションは、近代国家の暴力を否定し、グローバル資本主義が作り出した格差や分断を再びつなぎ合わせ、愛着と幸せを感じられる社会単位を実現させる可能性をはらんでいるのかもしれない。

VI. 「りか、やーかい(さあ、うちへ帰ろう)」

～おわりにかえて～

難民や政治的亡命者、労働移民や奴隷など、20世紀は多くの人口移動を生み出した。そしてグローバル化が進む21世紀においても、その波は相変わらず私たちをホームからさらっていく。「ちむぐくる」や「ユイマール」、「イチャリバチョーデー」といった古臭い概念も、今の時代にあって、沖縄というホームで私たちが人間性を取り戻すための魅力的な語りとして聞こえる。家系図を研究して自らのルーツを沖縄に探す「オキナワン・ジニオロジー・ソサエティー・オブ・ハワイ」のメンバーは「沖縄はムートゥヤー(門中が集う本家)みたいなもの」であり、「時々帰るのは当たり前」と述べた。今年おこなわれた第6回世界のウチナンチュ大会には、過去最高の7,000人を超える海外参加者が集まった。その閉会式で次世代代表として挨拶したブラジルの沖縄系三世マツモト・サトミ・カリーナは、こう述べた。

私は地球の反対側にあるブラジルで生まれ育ちました。母語はポルトガル語で生活習慣はブラジル式です。しかし幼い時から家で美味しいゴーヤーチャンプルーをよく食べていました。お盆の時、仏壇の前で、ウートートーして心を

込めてウヤファーフジに感謝します。親しい音は、三線のティントウンテンです。ブラジル人ですが、自分のルーツは沖縄にあります。何十年も前、船に乗って南米へ向かったオジーオーバーのおかげで、私は世界のウチナーンチュ、ブラジル・ウチナーンチュです。自分のルーツを探るために、留学生として沖縄へ二回参りました。そして今回は三回目です。毎回温かく歓迎されて、故郷に帰ったと感じます。感謝の気持ちがいっぱいです。留学の経験を通じて、アイデンティティの葛藤から解放され、私が二つの国のアイデンティティを持っているだけでなく、沖縄とブラジルの両地域に責任を持っていると気づきました。これからも全力で祖国のブラジルと愛しい沖縄の架け橋になりたいです。時代の流れを見ると世界、ブラジルも沖縄もいくつかの問題を抱えてきました。その歴史と現在の状況について深く考える必要があると思います。若者として世界をより良い場所にすることが不可欠です。平和、民主主義、ジェンダー平等、人権のある世界を目指してこれからも活動していきたいです。万国津梁の民、世界のウチナーンチュ、団結しましょう。沖縄のために。そして世界のために。頑張っていきましょう。

第1回大会から25年を経て、参加者の顔も変わってきた。しかし、変わらないものは沖縄をキーワードに共鳴し続ける物語と、ホームを探し続ける旅路なのかもしれない。彼女のメッセージは、多様性を保ちながらも沖縄をホームとし、万国津梁の民として世界や沖縄の課題に積極的に取り組んでいこうとする次世代の「世界のウチナーンチュ」の姿である。

ホームへの旅路は浜宿りであり、あの「チジュヤー」の第一節のような受難と孤独に満ちたものかもしれない。その受難の歴史は過去のものではなく、今なお沖縄人を苦しめている。親密性と愛着は私たちを強くする。強い愛着と絆を確信するからこそ、私たちは海を越える勇気を持ち得るのではないか。そしてたとえ渡海に隔てられていながらも、万国津梁の心を共有しながら、お互いのことを思えるネットワークを沖縄は構築しつつある。いつの日か「世界のウチナーンチュ」というホームが、成功した一部のウチナーンチュだけでなく、近代国家やグローバリゼーションの荒波に流されて行き場を失った人々の帰る場所となる時、それは同じ受難の経験を共有する多様な人々とつながりあい、大きな心の防波堤を築くだろう。それがマルチチュードという名のホーム空間なのかもしれない。

そのとき初めて、あの日、ロスの県人会館の片隅で「チジュヤー」を一人歌っていた、あの独り身のウチナーンチュにも、一緒に手をつないで帰るホームを私たちは作れるに違いない。それがマルチチュードという名のホーム空間、もしくは伊波普猷の「あま世」に呼応するウチナーンチュにとっての新たなフィクションなのかもしれない。そのフィクションはウチナーンチュにとって、新しいと同時に古くもある物語なのだ。

そのフィクションを現実のものとして想像・創造するとき初めて、あの日、ロスの県人会館の片隅で「チジュヤー」を一人歌っていた、あの独り身のウチナーンチュにも、一緒に手をつないで帰るホームを私たちは作れるに違いない。

参考文献

- 新垣誠、1998年、「沖縄の心 (Uchinanchu Spirit) ハワイにおける『ウチナーンチュ』という主体性についての一考察」、『移民研究年報』、日本移民学会編第4号。
- アントニオ・ネグリ&マイケル・ハート、2003年、水嶋一憲ほか訳、『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』、以文社。
- 親川志奈子、2016年、「世界のウチナーンチュが見た辺野古・高江」(リレーコラム沖縄という窓)、『世界』12月号、岩波書店
- サミュエル・P・ハンチントン、1998年、鈴木主税訳、『文明の衝突』、集英社。
- 第1回世界のウチナーンチュ大会実行委員会、1990年、『第1回世界のウチナーンチュ大会写真集』。
- 第2回世界のウチナーンチュ大会実行委員会、1995年、『第2回世界のウチナーンチュ大会企画書』。
- ダニ・ロドリック、2013年、柴山桂太、大川良文訳『グローバリゼーション・パラドックス—世界経済の未来を決める三つの道』、白水社。
- 富山一郎、1991年、『近代日本社会と「沖縄人」—「日本人」になるということ』、日本経済評論社。
- 富山一郎、2002年、『暴力の予感』、岩波書店。
- 豊平良金、1980年、『「呼寄せ移民」の苦難と栄光』、新沖縄文学45号(総特集・沖縄移民)、沖縄タイムス社。
- ベネディクト・アンダーソン、1983年、白石さや、白石隆(訳)、『想像の共同体～ナショナリズムの起源と流行』、リポート。

ユヴァル・ノア・ハラリ、2016年、柴田裕之（訳）、『サピエ
ンス全史～文明の構造と人類の幸福～』、河出書房新社。

Arakaki, Makoto, 2002, “*Hawai’i Uchinanchu and
Okinawa: Uchinanchu Spirit and the Formation of
a Transnational Identity,*” *Okinawan Diaspora* (Ed.
Ronald Y. Nakasone), University of Hawaii Press.

Globalization, Nation- State, and Okinawa as a “ Home:” Transformation and Direction of the “ Worldwide Uchinanchu” Narrative

Makoto Arakai

Abstract

The 6th Worldwide Uchinanchu Festival was held in October, 2016. The Festival has been held every five years since the first Festival in 1990 regardless of prefectural government's political orientation. “Uchinanchu,” the Okinawan identity plays a big role in the Festivals. As globalization proceeds, a modern nation state is losing its political and economic power to control over the transnational flow. Meanwhile structural violence of Japanese nation against Okinawa has no ends. “Worldwide Uchinanchu” discourse positions Okinawa in between the space of globalization and modern nation states. This article examines Okinawa functioning as the “home” for those Okinawans in diaspora to seek a spiritual unity.